
元の日本へ・・・2nd

バッシャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元の日本へ・・・.2nd

【Nコード】

N2282E

【作者名】

バsshャー

【あらすじ】

少年は日本を変えようと戦い、散った。再び強さを纏い復活を果たし、再び立ち上がる。

第一話 悪夢 復活（前書き）

「元の日本へ・・・」の続編です。一応繋がるようにしています。

第一話 悪夢 復活

西暦2000年

日本は人型機動兵器「セルク」の開発に成功。

自衛隊は日本軍と改名、異常な速さで国々を支配していった。
それから八年後・・・

西暦2008年

一人の少年が立ち上がった。

彼の名は一ノ瀬渚^{いちのせなぎさ}

彼は私設武装組織「ナイトメア」を結成した。

だが彼らはあと一步のところで敗れた。この戦いは「悪夢の戦役」と呼ばれた。

それから一年後の西暦2009年

渚は記憶を消され、ただの学生として過ごしていた。柊渚^{ひいらぎなぎさ}として

「ねえ、兄さん？」

「なんだ？」

渚はバイクを滑走させながら後部座席に乗る双子の妹・柊恋那^{ひいれぎれんな}の方に首を向ける。

「学校抜け出した上に建設途中の新東京タワーに行こうなんて」

「お前だろ？一緒に行くなんていったの」

「そうだけどさ」

「だから残れって言っただろ」

「だってまだ建設途中なんだよ？」

「それは表向きの話、裏ではかなり大金が動いてるって話だ」

「どう言う意味？」

「要するにカジノ場になってるって話だ」

「ふーん」

渚達が住むのは東京都。つい最近まではナイトメアに占領されていたが軍の力で排除され、かなりの大金で街はたった一週間で廃墟から都市へと復活した。

「兄さん、見て」

恋那は大型モニターを指差す。渚も釣られてモニターを見る。

『あの「悪夢の戦役」と呼ばれる戦いから一年が経ちました。残存兵力は軍により殲滅されています。尚、首謀者の一ノ瀬渚の死亡は確認されています。』

「馬鹿だよ。一ノ瀬渚って」と無邪気に笑いながら恋那は言う。

「そうだな、着いたぞ」

渚と恋那はバイクから降りて、中央エレベーターに乗る。

エレベーターのドアが開くと、高貴な服を着た男などカジノをやっている

「わあ、すごい」

恋那は感嘆を漏らす。渚はつまらなそうに辺りを見回す。

「こっちだ。」

渚は恋那の手を引いて、連れて行く

「学生がこんな所に来ちゃいけないじゃないか」

高貴な服を着た男が渚の前に立ち塞がる。渚は「ちっ！」と舌打ちして手を離す。

「いえ、僕も遊びに来たんですよ」

渚は身振り手振りで説明する。

「なら私とチェスをやらないかい？」

「商品は？」

「いいだろう。勝ったら１００万をやるう、負けたらその娘を頂こう」

高貴な服を着た男は恋那を指差す。恋那は渚の後ろに隠れる。

「いいでしょう。その条件忘れないでください」

「ちよっと兄さん！」

恋那は抗議するが渚は無視をした。

東京上空

「さて、そろそろ到着か？」

「はい、由井さん」

由井達は今、作戦を開始しようとしていた。所有しているのは「セルク」と「ベクセル」

他に新型が二機、全部で七機のみで他は歩兵部隊で編成されている。
「諸君、我々はこれよりナイトメアのリーダー、一ノ瀬渚を奪還する。諸君の働きに期待する！」

由井は堂々と告げた。団員からは歓声が上がっていた。

「チエックメイト」

これで五連勝、すでに渚は五百万と言う大金を手に入れていた。

「恋那を気に入ってるようですが、そろそろ諦めたらどうですか？」
周りからは「おお！」と歓声が上がる。渚は余裕の笑みを浮かべる。
「そうだな、そろそろ終わらせよう」

そう言うや否や男は懷から銃を取り出し、渚に銃口を向ける。

「腐ってやがる」

渚は誰にも聞こえないように呟いた。

「さようなら、少年」

男が引き金を引こうとした時だ。

ドオン！

突然、爆発が起きた。渚はそれを利用し恋那の手を引いて階段を降りようとした。だが階段は数機のセルクと数十人の歩兵によって塞がれていた。

「ちっ！」

渚は舌打ちをすると中央エレベーターに戻り、持ち物を全部恋那に預ける。

「恋那！お前はエレベーターを使い！俺は階段で行く！」

「ちょ、兄さん！」

渚は恋那の制止を振り切り、さっきの階段へ向かった。

階段の方は炎上し、さっきまで居たセルクの残骸などが残っていた
「軍がやられた？誰に？」

渚はその場で佇むと一機の機体が近づいて来た。その機体は渚に手を差し伸べる。

その機体を見た瞬間、渚を激しい頭痛が襲った。渚は膝をつき、頭を抑える。様々な光景が

渚の脳内を過ぎった。そして渚は立ち上がる。

「ロフティか？」

「はい、お迎えに上がりました。リーダー」

ロフティは渚の問いかけに応じた。

「思い出したぞ！俺は柊渚なんかじゃない、俺は一ノ瀬渚だ！」

第一話 悪夢 復活（後書き）

以上で第一話は終了です。前作や今作の感想を頂けたら嬉しいです。

第二話 中央 突破（前書き）

復活を果たした渚の最初の戦い

第二話 中央 突破

「今、指揮をしている人物は？」

ベクセルの手のひらに乗り、渚は尋ねた。

「由井さんです。リーダーを発見次第、屋上に連れて行くよう命令されました。」

「由井に連絡は取れるか？」

「無理ですね、由井さんの居場所も知らないもので」

「仕方ない、連れて行ってくれ！」

「了解」

渚を乗せたベクセルは上の階を目指し進む

その頃、東京タワー周辺

すでに軍が展開し、完璧と言って言い程の布陣である。その中に陸上戦艦「無頼」の姿があった

「將軍、お待ちしていました。」

仕官は一斉に一礼する。

「状況は？」

「はい、現在ナイトメア残存部隊は屋上から進入している模様、10分後に降下部隊が到着致します。そのため脱出ルートは地下ルート及び中央ルートのみ絞られます。ですが・・・」

「中央ルートには我々本隊が居る、と言う訳だな？」

「はい」

「よし、そのままの陣形を維持せよ！」

「はっ！」

「ここか？」

「はい」

渚は口フティに連れられ屋上に来ていた。

「こちらの輸送機の中にリーダー専用機が収納されています。」

渚はそのまま輸送機内を見渡す。一機の真紅の機体が存在した。

「これか？」

「はい」

「よし！」

渚は真紅の機体に取り込み、起動させる。

「機体名「紅月」か・・・」

渚は操縦桿を強く握る。久しぶりの操縦で手が震えている。

「全機、聞こえるか？」

「何？ナイトメアが反撃しているだ？」

「はい、五代將軍」

「無頼」のブリッチでは動揺しはじめる者が現れた。

「落ち着け！まだ負けた訳ではない、このままの陣形を維持、私の

「紫電」を用意させよ！」

「はっ！」

「B1はそこで待機、A1からA5は屋上に戻れ！」

「了解」

渚の指揮によつてさつきまで劣勢だったナイトメアも次第に五分五分になって来ている。

「渚、やっぱりいたか」

蒼い機体が渚の紅月に接近する。渚は声で由井である事に気づいた。

「由井、お前の蒼月は大型ビームキャノンを装備してるよな？」

「お前の推測通りだ。俺の蒼月には大型ビームキャノンを搭載している。」

「中央ゲートに行け！敵本陣を突破する」

「分かった」

由井の蒼月は中央ゲート付近に向かった。

「ロフティの部隊はそのまま、C1はその道を塞げ！」

「体長！上空に敵増援が！」

「何！」

たしかにリーダーには50を超える数の機影が確認されている。

「ちっ！由井、チャージは？」

「あと10分」

「由井、紅月には可変機能が搭載されてるよな？」

「ああ」

「分かった。感謝する。」

「おい！渚」

渚は紅月の操縦桿を引き、人型形態から戦闘機形態に変形する紅月

「面白いな、この機体」

紅月から一斉にミサイルが放たれた。

第二話 中央 突破（後書き）

今回の機体説明

TU-I1K「紅月」

全長4、53m（B体型時）

名前の読みはこうづき

名前の通り赤い機体で接近戦に特化している。支援組織「ファントム」が開発した機体で世界初の変形機構が実現された機体。装甲がギリギリまで減らされている。人型のB体型と戦闘機型のF体型がある。

装備B体型時 プラズマサーベル、G・T・S（グラビティ、ツイン、ソード）F体型時 多目的ミサイル、小型ビームライフル
TU-I1S「蒼月」

全長4、7m（B体型時）

名前の読みはそうつき

蒼い機体、紅月の兄弟機でこちらは射撃戦に特化している。後部のフライトユニットに大型ビームキャノンが搭載されている。

装備B体型時（F体型時も同様） ビームサブマシンガン、小型ビームガン、大型ビームキャノン

第三話 無頼 轟沈（前書き）

えっと今回は短いです。

第三話 無頼 轟沈

渚、由井、ロフティの三人と鹵獲したセルクに乗る団員達は中央ゲートに集合を開始した。

理由は由井の蒼月で本陣を突破するためだ、だがはつきり言っただ劣勢だ。

「P1何をやっている!」

「体長! 敵の新型がああ!」

「おい! どうしたP1」

次々に味方の機体が破壊されている。脅威的な速さで

「敵は単独なのか? 由井、チャージは?」

「あと五分」

「急げ! 頼む」

「どうした? そんなに慌ててそっちにはロフティが居るだろう?」

「そんなんじゃない!」

ドオン!

一機の朱色の機体が壁を打ち破り、煙を纏いながら接近する。

「リーダー、ここは」

そう言つてロフティのベクセルが渚の紅月の前が出る。

「あの機体・・・戦い方がバリスタに似ている・・・先行量産型か?」

一斉に黒いセルクが射撃を行うが敵は難なく避け、セルクをサーベルで切断していく

「白兵戦なら!」

ロフティのベクセルもサーベルを引き抜き、朱色の機体のサーベルを受け止める。

「渚! チャージ完了した」

渚は連絡を受け、ロフティに合図を送る。ベクセルは煙幕を撒き散らす。

「行け！由井」

「目標確認、行け！」

渚の命令と共に赤い閃光がゲートを打ち破り、戦艦「無頼」を貫く

「將軍、高エネルギー接近！」

「何！・・・うわあああ！」

由井が放った赤い閃光は「無頼」を一瞬で消滅、本陣に居た部隊も全滅

それと同時にナイトメアの部隊は一斉に進軍を開始した

「このまま話しがっている足立区に逃げ込むぞ！」

「了解」

ナイトメアの一団は足立区に向けて前進、日本軍は壊滅状態に陥っているため追撃はできない

こうして復活したナイトメアの最初の戦いは勝利に終わった。

第三話 無頼 轟沈（後書き）

今回は戦艦の説明

大型輸送機「カウラ」

この輸送機はセルクのなどの運用・搭載に優れている。武装はない
陸上戦艦「無頼」

日本軍が開発した戦艦で攻略戦や防衛戦の移動指令基地になる。「
カウラ」と同じ様にセルクなどの運用・搭載ができる。

武装 6連ミサイル、主砲、リニアキャノン×3

番外編 キャラ設定（前書き）

おまけ感覚で書いたのでスルーしてもらってもかまいません

番外編 キャラ設定

ここは渚達の通う高校・星崎高校の放送室、二人はそこに居た。

「どーも、こんにちは！ナイトメアのリーダーを務めています。一ノ瀬渚です。」

「恋那です。今回はキャラ紹介なんだよね？兄さん」

「えっ？そうなの？俺はてつきり機体紹介だったと思ったんだけどな」

「それは今度、今回はキャラだよ！事前に皆さんにはプロフィールを書いてもらっています。」

「ふう〜ん」

「ではまずは兄さんから！」

名前 一ノ瀬渚 いちのせなぎ 性別男

ナイトメアのリーダー、二年前の虐殺を目撃してしまいそれ以来、日本を変えようと決意する。大のコーヒー好きで一日三食が殆どコーヒー、と言うか一日三飲

機体の腕は一流で日本軍の親衛隊を相手にしても劣らない。悪夢の戦役後、戦死した事にされ記憶を消され、柊の姓を名乗っていたがロフティの乗るベクセルを目撃し記憶を取り戻した。

搭乗機 ラング、ラングR-2、紅月

「以上で兄さんのプロフィールです。」

「まあまあだな」

「ちなみに今回紹介するキャラは2ndに出てくるキャラもしくはわ予定のキャラを紹介します。」

「じゃあ次！」

渚は紙の束から一枚、取り出す。

「おっ！由井だ」

名前 紅坂由井こうさか ゆい 性別男

渚とは幼馴染で同じく虐殺を目撃、ナイトメアに参加。渚の右腕的存在、ぶっちゃけ操縦技術は渚と変わらないが射撃能力は渚より上、悪夢の戦役後は渚の代わりにナイトメアを指揮していた。好物はオムライス。搭乗機 セルク、ガラン参式、蒼月

「うん、確か射撃面は俺より上だな」

「そうなんだ。では次は兄さんを追い詰めた、トオルさん」

名前 夜見トオル（よみとおる） 性別男

日本軍の若きエース、試作機「バリスタ」のパイロット。渚の親友だったが二年前の虐殺で死んでいたと思われていた。身体能力は渚より上だが操縦技能は渚の方が一枚上手。悪夢の戦役後は日本軍最強の部隊「七武衆」に所属した。搭乗機 バリスタ

「トオルめ！お前さえ居なければ！」

「兄さん、落ち着いて」

「落ち着いていられるかあゝ！」

「はい、狂った兄さんを置いて次いきます。ええっと次はロフティさん」

名前 ロフティ・パノラフ 性別男

元EU軍パイロット。どう言う経歴でナイトメアに参加したかは不明。渚には信頼されている。操縦技能は日本軍の一般パイロットよりは高く、専用機「ベクセル」を使いこなす。ちなみにナイトメア壱番隊。搭乗機 セルク、ベクセル

「兄さんが信用してるからすごい人なんだよね」

「ああ、もっと性能がいい機体があれば才能をもっと活かせると思

うんだけどな」

「じゃあ、次がサリーナさん」

名前 サリーナ・アルト 性別女

ロフティと同じく渚に信用されている。日本軍に両親を殺されナイトメアに参加。ロフティには負けず劣らずの操縦技能。専用機はロフティと同じ「ベクセル」搭乗機 セルク、ベクセル

「はいっ、次」

「めんどくさくなつたんだ。次はええつと・・・あつ！私だ」

名前 柊恋那^{ひいらぎれんな} 性別女

学校では渚の双子の妹で通っている。姓は偽名でとにかく謎が多い。ちなみに渚の事を心の隅で好きになっているが軍からの命令でなかなか素直になれない。一体、軍からの命令とは・・・。搭乗機 不明

「恋那も何か乗るの？」

「さあ？」

「そうか。どうやら今回はここで終わりか？」

「そうみたいです。では兄さん、最後に一言」

「うん、日本人よ！私は帰ってきた！」

「以上で第一回キャラ紹介でした。」

第四話 捕虜 奪還

渚は足立区役所に入るや否やパソコンを広げ、東京タワーでの戦いの記憶映像を再生した。今回は由井の蒼月のおかげで勝てたものの今度はうまくいかない確立が高い。それに今の戦力でははつきり言うて攻め込まれた時に防衛はきつい、今ナイトメアがやるべき事は戦力増強だ。

「渚、これ」

不意に由井が缶ジュースを投げ渡す。渚は難なく受け取る。

「由井、お前の意見が聞きたい」

渚はそう言うのと由井にパソコンの画面を見せる。映し出されているのは東京湾周辺の地図だ。

「これがどうした？」と由井が尋ねると渚は簡単に答えた。

「ファリナ達が捕虜とした拘束されている所だ」

「ここは何処にファリナ達は捕まっている？」

この由井の問いにも渚は難なく答える。マウスを廃棄物処理場に向ける

「ここに拘束されているはずだ。だが今の戦力で攻め込むのは無理だ。そして今回、俺が考えたミッシヨンプランだ！」

そう言うて渚は一枚に紙を由井に渡す。由井はその紙を受け取り絶句した。

「お前・・・本気か？」

「ああ、俺はいつだって本気さ」

そして翌日、渚は恋那を星崎高校の屋上に呼び出した。

「ごめん、恋那しばらく連絡できなくて」

渚がそう言うのと恋那は首を横に振る。

「ねえ、兄さん聞きたい事があるんだけど・・・」

「何かな？」

「兄さん、あの後どうやって逃げたの？」

「非常階段があつてさ、そこから外に出れたんだよ」

渚は笑顔で答えた。だが恋那は俯く

「どうした？」

渚は首を傾げる。すると恋那の拳が渚の頬を掠った。

「兄さん・・・いやーノ瀬渚、あなたをここで殺す」

殺気が籠った声、渚は余裕の笑みを浮かべ両手で拍手する。

「ご苦労だったね。偽りの双子の妹、柊恋那」

「どう言う事？どうしてそんな余裕な顔をしてるの？」

「柊恋那、西暦1993年四月生まれ、幼い頃に両親に捨てられ、傭兵として育てられた。現在は日本軍・暗殺部所属、階級は少尉で日本軍の「バリスタ」の量産型先行試作機「バスタ」のパイロット。そして現在の任務は一ノ瀬渚つまり僕の抹殺」

「どうしてそんな事を知ってるの？」

恋那は混乱し始めた。本来、トップクラスの情報が、軍でも極一部の人間のみしか知らない情報。

なんでこいつが知っている？

「そうだ！忘れていたよ、君は両親を探すために軍隊に入った、そうだろ？僕は君の両親の情報を持っている。」

渚の言葉によるとどめ、恋那はその言葉を聞いて崩れる様に座り込む。そして渚は手を差し伸べる。

「もし今度、僕に協力してくれるなら君の両親の情報を提供しよう。どうだい？」

恋那は渚の手を取り「うん」と答えた。

そして作戦開始当日

今回使用される機体数は合計三機、渚の乗る「紅月」由井の「蒼月」そして恋那の朱色「バスタ」

作戦内容は至って簡単、まず「バスタ」が敵の指揮系統を混乱、かく乱しその隙に渚の「紅月」が突撃、捕虜を奪還し由井の「蒼月」が大型ビームキャノンで突破口を開き、撤退。

すでにF体型で待機する「紅月」と「蒼月」

「作戦、開始！」

渚がそう告げた瞬間、警報が鳴り響いた。

「いいのかな、渚を信じて」

恋那は迷いながらサーベルを引き抜く、バスタのサーベルの刀身が赤く輝き次々にセルクを切断、破壊していく

「恋那、もういいか？」

「はっはい」

渚の突然の連絡に驚きながら、確認して合図をだした。

「行くぞ、紅月」

渚はF体型の紅月を加速させ、ファリナ達が囚われている場所へと急行した。

「はあああ！」

紅月をB体型に変形させ、プラズマサーベルを引き抜き倉庫を破壊、ファリナ達をカウラに搭乗させ、恋那にも来るように促す。

「由井、やってくれ！」

「了解」

蒼い機体から一筋の赤い閃光が放たれ、応戦していたセルクの部隊は全滅、カウラを離陸させ、拠点になっている足立区へと帰還した。

第四話 捕虜 奪還（後書き）

機体説明

B R - R 「バスタ」

全長 4、4 m

この機体は「バリスタ」の戦闘データを基に開発した日本軍の次世代量産型の機体でまだ指揮官クラスの人物にしか配備されていない。恋那の乗る機体の色は朱色だが本来は白と赤、機動性は「バリスタ」の量産型のため、かなり高い

第五話 新たな力

前回の戦いでファリナ、サリーナ、応千らの捕虜を奪還した渚達は今後の方針を決める為に会議室に集まっていた。

「今後の方針を決めたいのだが・・・」

渚が話しを切り出したとき、ファリナが手を上げた。

「ひとつ聞きたい、なぜあの時指揮を放棄した？」

ナイトメア全員が疑問に思うことだ。一年前の戦い、富士山戦で渚は指揮を放棄したのだ。その事が原因で負けたと言っても過言ではない。

「貴公がもし指揮を放棄しなければ勝てたかもしれない」
さらにファリナが追い討ちをかける。

「それ、俺も聞きたい」とファリナに続き由井も渚に問いかけた。
それもそのはず渚を探すために自分の愛機を失ったのだ。
渚はしばらく考えたが、やはり信用してもらおう為に話す事にした。
「分かりました。貴方方にすべてをお話ししましょう。」

あれから一時間・・・

「以上・・・です」

渚は全てを話した。自分が指揮を放棄した理由、提督の息子である事、記憶を消されていた事

「なるほどと言うべきか・・・」

「まだ納得できない部分もあるが、一応理解はできた」

由井もファリナもそれなりに納得した。

「ありがとうございます、ファリナさん」

渚は一礼すると本題を切り出した。

「では今後の方針を決めたいのですが、意見はありますか？」

渚は意見を求めた。結果出た意見は戦力増強と他国との連携の二つ、だが今現在、はつきり言って両方とも実現が難しい。

まず戦力増強だが前回の捕虜奪還で兵力は増えたが強くなった訳ではない。それにナイトメアは足立区のみしか存在しない、それに四方はすでに日本軍に囲まれてる。

そして次の他国との連携も同じく難しい

「では、これで会議を終わります」

渚は一礼し、応千に書類を渡すと一目散に会議室から抜け出し、パソコンを開く

（どうすればいい？考えろ、渚）

数日が経った頃・・・

渚が応千に渡した書類は設計図だった。機体名は「月島」と「焰」。外見は変わらないが「月島」はファリナ専用機、「焰」はロフティとサリーナの専用機として戦闘データも計算した結果を基に設計した機体だ。

「どうだ？応千、もう完成したか？」

渚は格納庫に來た時にはすでに完成寸前だった。

「あとは模擬戦だけだ」

応千がそう答えると渚は「そうか」と頷いた。

太平洋の上空に一機の大形輸送機が日本に接近しようとしている。

アメリカ連邦国所有の大形輸送機内部

「亜里亜隊長、本当によろしいので？」

「うん、手加減は一切なしよ？いいわねクリス？」

「了解しました」

クリスと呼ばれた女性は頷くもあまりやる気ではなかった。

「さあて、今のナイトメアは強いのかな？」

「リーダー、上空に所属不明機が接近してきます」

ロフティは渚にそう告げ、渚は応千に連絡を取る。

「応千！紅月は出せるか？」

「ああ、ついでに「蒼月」「月島」「焰」も出せるぞ」

「分かった。全員にスクランブルを掛けてくれ」

「了解」

「ロフティ！お前も格納庫に向かえ」

「はい！」

渚はパイロットスーツを着こなし、F体型で待機している「紅月」に乗り込む。

「「蒼月」「月島」「焰」全機聞こえるか？これより我々は所属不明機を迎撃する。私と由井は上空で牽制、降下してくる部隊があったら「月島」と「焰」で迎撃、以上だ」

渚は簡単に作戦を述べた。咄嗟に考えたにしてはいい作戦だ。

「「了解」」

全員承知した事を確認すると渚は紅月を加速させ、離陸を開始した。

輸送機内部

亜里亜を筆頭にパイロットスーツを着こなす五人の女性

「みんな！いい？」

「亜里亜隊長、そんな声を出さなくても・・・」

「いいの！戦いはノリがいい方勝つの！」

「さつさと作戦の確認をしてください」

「まあいいや、今回の作戦は簡単でナイトメアの実力を試す。それだけ」

亜里亜は四人が確認した事を確認、そして自分の専用機に搭乗する。そして輸送機から五機の機体が降下した。

第五話 新たな 力（後書き）

機体説明

「月島」

全長4、53m

名前の読みは「つきしま」

「焰」と外見は変わらない。これはファリナ専用機として設計された為、ファリナ以外は乗りこなせない。

機体性能はかなり高く、バリスタと同等の性能を誇る。尚型式番号がないのは渚曰く「めんどくさい」と言う理由で付けなかった。ちなみに後部には「スピナー」と呼ばれるローラーを脚部に装備する事により、ホバー機能搭載型の機体よりエネルギーを消費せずに済む。機体色は青と銀

装備 対機動兵器用刀「豪熱」、ハンドガトリング、脚部に搭載されているミサイル

「焰」

全長4、52m

名前の読みは「ほむら」

「月島」と変わらないがこちらの機体はロフティとサリーナ専用機として設計された機体。「月島」同様、機体性能は高い。

装備は「月島」と同じ。機体カラーは赤と銀

第六話 再開 実戦

始まりは突然だった。

「由井、俺がミサイルを放ったと同時にビームキャノンで敵を撃て、それで敵を散り散りにする。」

「ふっ、面白いじゃないぜ」

「行くぞ」

渚は紅月からミサイルを放つと同時に機体を変形、B体型になると蒼月の後方にさがる。

「いけよ！」

蒼月から赤い閃光が放たれ、敵は渚の予測通り、散開して散り散りになった。

「へえ、あの赤い機体が隊長機か」

亜里亜がそんな事を呟く

「そんな事より指示、お願いします。」

クリスは呆れたように言う

「ごめん、ごめん。私は赤いのをやるからクリスは蒼いのでランカとマリとミュンは地上^{した}の敵を、いいね？」

「了解」

亜里亜達の部隊は蒼月の放ったビームキャノンで散開した。

渚は降下する部隊の一機を見て驚いた。敵は五機、その内の一機にガラン参式に似た機体があったのだ。

「あれが隊長機か・・・俺はガランもどきをやる、いいな由井？」

渚が由井にそう尋ねると・・・

「なんで俺に聞くんだよ！別にお前が指揮官なんだからしっかりしろよ！」

と言う反論が帰ってきた。渚はここであえて無視をした。

「他の三機も注意しろ！いいな？」

「分かった」

「了解」

亜里亜の作戦通りなのか渚の予測通りなのかは不明だが双方の思うようになった。

渚の乗る紅月は亜里亜の乗るガランもどきと対峙、他の機体も同様の結果になった。

「さあて、ナイトメアいくよ！」

亜里亜の乗るガラン参式に似た機体は右腕が大型クローになっている。そのクローで紅月を掴もうとする。

「甘い！」

紅月はフライトユニットをはずし軽装にすると姿勢を低くし腰部からプラズマサーベルを引き抜き斬りかかる。

ザンツ！

両者共々空振り、間合いを離す。するとガランもどきは左腕を突き出しハンドガンを連射、両腕の破壊は免れたもののプラズマサーベルは爆散、さらに間合いを離す。尚もガランもどきはハンドガンを連射

「距離が離れるだけ不利だ！」

「どうしたの？今のナイトメアはの実力はこれだけ？」

紅月はひたすら距離を離す。それを追うガランもどき

「やるか！」

紅月は後部からG・T・Sを引き抜き、繋げ槍のように扱う、刀身は赤く輝き紅月は一気に加速、ガランもどきの懐に入り込む。

「チェックメイト！」

紅月はガランもどきの左腕を切断、足許を一蹴ガランもどきを押し倒す。

「降伏しろ！俺達の勝ちだ！」

剣先をガランもどきのコックピット付近に向ける。一人の少女がガ

ランもどきから出てくる。

「あはは、私達の負けです。あなたが今のナイトメアのリーダーですか？」

紅月はG・T・Sを収めると停戦命令をだした。

「亜里亜？」

渚は素っ頓狂な声を上げた。

「ごめん、由井あとは頼んだ。」

渚は紅月を変形させ、勝手に基地に戻る

「おいっ！渚って・・・亜里亜？」

由井はガランもどきの方を見ると一人の少女・亜里亜を見つけた。

「あつ！その声、由井だね久しぶり」

亜里亜はガランもどきの上で飛び跳ね大きく手を振る。

「そう言う事か・・・」

由井は内心納得した。

一時間後・・・

「ここが格納庫、覚えた？」

由井は亜里亜達に簡単に基地内部を説明する。応千は亜里亜達が乗ってきた機体に整備に追われてる。渚はどっかに身を潜めている。

（渚も大変だな。あの手紙だと自分の事を死んだ事にしてるだろうし）

由井はそう考えていた。

「ねえ、由井」

「何？」

「あの赤い機体のパイロットに会いたいんだけど・・・」

「ああ、紅月のパイロットが多分自室で寝てると思う」

「そうか・・・残念だったな」

「また会えるだろ」

「じゃあ、応千さんの所に行ってきたいい？」

「ああ」と由井は頷き、亜里亜を見送った。

（さすがにあそこにはいないだろ・・・）
だが、由井の考えは甘かった・・・

渚は別の格納庫で応千と「月島」と「焰」について打ち合わせをしていた。

「戦闘データはどうだった？」

応千はデータが表示されている書類を見て、答えた。

「かなりいいのが取れた。特にファリナは優秀だった」

「やはりな、あの機体は米軍の「ファースター」だろ。確か親衛隊級のパイロットのみに配備されてる機体だよな？」

「そうだ」

渚は缶ジュースを飲み干し、缶を蹴り飛ばす。

カコン！

見事、缶はごみ箱に入った。

「まさかガランもどきはでてくるとはな」

訝しげに呟いた。

「そうだ、渚」

「どうした？」

「紅月のデータを取りたいんだけどさ」

「分かった。なんのデータが取りたいんだ？」

「変形速度って言えばいいのか？」

「分かった」

渚は応千に言われたとおりに紅月に搭乗・起動させる。

「応千さん！」

応千は声がした方を向くと亜里亜が居た。

「おっ、亜里亜ちゃん久しぶりだな」

「お久しぶりです。あの赤い機体・・・なんて名前ですか？」

「あれは「紅月」だよ。パイロットは渚」

応千は当然のように答える。

「渚？」と訝しげに問い返す。

「そうだけど・・・」

『応千、行くぞ?』

「ああ、頼む」

渚は紅月を機用に操作しB体型からF体型に変形させる。わずか二秒で変形を終えた。それを見届ける応千と亜里亜

「渚・・・生きてたんだ」

「うん?なんか言ったか?」

「ううん、なんでもない、データ取り終えたら渚に会わせて」

それだけ亜里亜は告げて、格納庫を後にする。

第六話 再開 実戦（後書き）

機体説明

F A - S 「ファースター」

全長4、52メートル

アメリカ連邦国所有の機体で親衛隊級のパイロットのみに配備される機体で性能は「月島」や「焰」に多少、劣る程度。ホバー機能搭載機

装備 対機動兵器用ランス、ハンドガン、サブマシンガン

第七話 七武衆 出陣

東京都庁・指令部

日本軍は東京を統治していた五代が戦死したため指揮系統が混乱していた。都庁では次の將軍を決める為に會議が行われていた。

「將軍が戦死なされてこの様か・・・」

士官の一人がそう呟いた。今、會議室ではテロや反乱が起きた後の画像が投影されている。ナイトメアが復活してから各反乱勢力が活発化しているのが原因だ。

「どうにかならないのか?」「どうにかなればとづくにやっている」と言い争いが始まるうとした頃・・・
ドオン!

「都庁に何者かが侵入、迎撃部隊は迎撃を開始せよ!」

六機のセルクガリニアライフルを目標を向けて、一斉に攻撃を開始する。

「うゝん、その対応は間違っではないけど・・・35点?」

深緑の戦闘機は攻撃を難なくを回避、そのままビームバルカンを連射し六機のセルク部隊を中破に留め、進行を続ける。

「ここは私達、五代親衛隊が受け持つ!」

その機体はセルクではなく「フアング」五機の編隊

「おっ!出てきたな」

深緑の戦闘機は次第に人型に姿を変えていく、日本の鎧の様な機体が姿を現した。

「あなたは七武衆の藤堂ですね?」

「いかにも!諸君の力を見たい、手合わせ願えるか?」

その言葉を聞いて一機のフアングが前に出る。

「私達もここまでされては納得いきません。行きます」

「ふっ、感謝する」

深緑の機体は単身で五機のファンングに接近、刀型の武器「月下」を取り出しファンング一機の両腕を切断、だが深緑の機体はファンングに囲まれていた。

「甘い！」

「月下」を巧みに扱い三機のファンングを戦闘不能に追い込み、残り一機も左腕と頭部を失っている。そして「月下」コックピットに近づける・・・

「そこまでだ！」

一人の少年がその機体を制止する。

深緑の機体は「月下」をファンングのコックピットに向けたまま止まる。

「おおっ！トオル！」

一人の男が深緑の機体から出てくる。トオルは呆れながらも降りてくるのを待つ。

「「螺旋」を持って来るのはいいけど、僕の「バリスタ」を持って来てって頼んだよね？」

「来るよ、来る。来週に紗枝さんも一緒に・・・」

トオルはため息を吐く、その最中青紫の機体が降下してくる。

「あれえ、もう終わり？」

「「斬電」まで白河？」

「正解」と大きな声が斬電から聞こえてくる。全然状況が把握できない五代親衛隊はトオルに説明を求めた。

「と言う訳で今度から僕がこの將軍に就任します。」

トオルは会議室で堂々と宣言した。これに意見が賛成派と反対派に別れた。

賛成派は一年前にナイトメアのリーダー、一ノ瀬渚を捕まえたと言う実績と高い身体能力や「バリスタ」の操縦技術力などを評価した上での事だ。

反対派の理由は若すぎると言うのが最大の理由だった。

だが藤堂や白河の後押しにより、トオルは無事將軍に就任した。

「はあゝ」

渚は区役所の食堂でコーヒーを飲みながら深いため息を吐く、テーブルにはパソコンが置かれている。

「どうした？ため息なんて吐いて」

「昨日・・・」

「昨日？」

「昨日、亜里亜に五時間ぐらい説教された挙句、「私の機体を直しなさい」って言われて仕方なく応千に協力を求めても八時間かかった上に作戦プラン立てるのに十時間かかって一時間しか睡眠とってないんだよ！」

「だったら、今から寝れば？」

「そんな事できるか！」と言いながらパソコンのある動画を見せる。その動画にはトオルが映っていた。

「トオルがどうした？」

「戦死した五代に変わり就任した新しい將軍だ」

「トオルがか・・・」

しばらくの沈黙、渚は黙々とパソコンのキーボードを叩き続ける。そこには「紅月」「蒼月」「月島」「焰」の機体データが表示されていた。

「由井、今度の戦いちよつときついぞ」

渚はそれだけ告げると席を立ち、姿を消した。

第七話 七武衆 出陣（後書き）

七武衆

日本軍最強の部隊で部隊名通り七人で編成されている部隊、提督直下の部隊。普通の指揮系統では違う系統で動いている。

機体説明

RS - EN「螺旋」

七武衆の一人、藤堂の専用機。接近戦に特化している。機動性は「紅月」に劣る。「紅月」「蒼月」と同じく変形機構を搭載している。機体カラーはセルクと同じでオリーブグリーン

装備 対人型機動兵器刀「月下」、ビームマシンガン
ZA - DN「斬電」

七武衆の一人、白河の専用機。重装甲で機動性は通常のセルクに劣るもののかかなり高い耐久性を持つ、「蒼月」の大型ビームキャノンの直撃にも耐える事ができる。機体カラーは青紫

装備 四連ビーム砲、多目的ミサイル、全方位リニアガン

第八話 都庁 強襲

渚はナイトメアの団員を集め、部隊編制を発表した。

「零番隊、隊長は崩月亜里亜」

零番隊、亜里亜を筆頭とするクリス、ランカ、ミュン、マリの五人。渚の直下部隊

「壹番隊、隊長ファリナ」

ファリナの「月島」が率いる部隊。この部隊が事実上主力部隊となる。ファリナの部隊に全て対人型機動兵器用刀が装備されている、

「貳番隊、隊長は紅坂由井」

この部隊も主力となる部隊の一つでこの部隊は遠距離や中距離攻撃に特化してる部隊。

「参番隊、隊長はロフティ。四番隊、隊長サリーナ」

渚は部隊編制の発表を終えると隊長たちを集め会議室へと急いだ。

「東京都庁を制圧する？」

由井は驚いていたが他の皆は黙々と聞いている。

「敵の部隊に七武衆が居る。今の將軍は夜見トオル」

「七武衆って何？」

亜里亜が疑問をなげ掛ける。それに渚ではなく由井が答える。

「七武衆ってのは日本軍最強の部隊、提督の直下部隊で通常の指揮系統とは別の指揮系統で動く部隊だ」

渚は今度の戦いの戦況予想図をモニターに移した。

「今私は確認した中では七武衆の三人が東京（とうきょう）に来ている。予測される機体は「バリスタ」「螺旋」「斬電」の三機、「バリスタ」は私でどうにかする。ファリナは螺旋を頼みたい」

「了解した」と頷くファリナ

「亜里亜の部隊には「斬電」の相手をしてもらいたい」

「OK」とVサインで答える亜里亜

「俺達は？」と尋ねる由井に渚は都庁に攻める様に伝えた。

「尚、私の機体は事情により30分遅れての出撃になる。作戦開始は明日に行う！いいな？」

「了解」

その日は雨が降っていた。不安を抱かせる雨模様

「ナイトメア、全機出撃！」

由井の号令と共に黒い「セルク」と「蒼月」が攻撃を開始するそれに続くファリナ部隊。

「尚、作戦開始30分は私が指揮を執る！」

「トオル將軍！ナイトメアが活動を開始しました」
司令部で待機していたトオルはその報を聞いた。

「全機応戦準備！僕達も出ます！指揮は紗枝さん、貴方に任せます」

「はい！」

「いくよ、藤堂、白河」

「うん」

ナイトメアが使用している格納庫

渚は紅月の新装備を装備する為に格納庫に数人の整備士達と作業に当たっていた。

「応千！間に合うか？」

「あと15分かかる！」

「急いでくれ！」

「了解」

その後も作業は続いた。

「トオル將軍、作戦の概要を確認します」

紗枝が的確に説明を開始する。

「敵は三方向に別れて進軍、トオル將軍は前方から進軍してくる敵

を殲滅してください」

「了解」

「「バリスタ」発進！」

「発進！」

白い機体に続き深緑の機体、青紫の機体が滑走する。

「由井！七武衆が来たようだ私は渚に言われた通りに行動する」

「了解です。気をつけてください」

由井の部隊からファリナの部隊が離れていくこれにより由井の部隊は三分の二になった。

ファリナの乗る「月島」その目の前には藤堂の乗る「螺旋」が対峙している。「月島」は刀「豪熱」を引き抜く、それに続き「螺旋」は「月下」を引き抜く。お互いに距離を保つ

「七武衆、どれほどの力が見せてもらおう」

ファリナは「月島」のスピナーを展開、加速させ「豪熱」を構えて接近する。

ザンツ！

「甘い！甘すぎる！」

ガンツ！

「螺旋」は月島を蹴り飛ばす。数メートル後退した程度、「月島」は体勢を立て直し再度攻撃を仕掛ける。

ギーン！

いきなりの攻撃、「螺旋」は「月下」で応戦。だがやはり力では「螺旋」が上回っている。

「このままじゃ！」

さすがのファリナにも焦りが出てきた。

ガンツ！

「月島」はそのまま仰向けに倒れ、「螺旋」は容赦なく「月下」の剣先を向ける。

第九話 紅月 勝利

都庁から左方向に攻めている亜里亜の部隊だが状況は最悪、ランカ、ミュン、マリの各機は戦闘不能、残る亜里亜の「エッジ・ナイト」とクリスも乗る「ファースー」。だがクリスの機体は左の腕部を破損している。相手は七武衆の一人、白河の乗る「斬電」

「亜里亜隊長、ここは時間を稼ぐ事に専念しましょう。今の私達では無理です。」

「そうだけど、時間稼ぎもできるかどうか分からないのよ？」

「ですが！」

再度、「エッジ・ナイト」は大型クローを向ける。そして「斬電」の腕を掴む。

「詰まんないよ、これじゃ、弱いものいじめだよ」

「斬電」は掴まれた腕を振りかぶる。

ガン！

衝撃と共に「エッジ・ナイト」は仰向けに倒れる。さらに「ファースー」も仕掛けるが同様に投げ飛ばされ仰向けに倒れる。

「私達じゃ勝てない？」

「応千チエックは？」

「できてる」

渚は応千から許可を貰うとパイロットスーツを着こなし、搭乗する。

「「紅月甲冑型」出るぞ！」

左腕部が改造された「紅月」、整備士は離れた事を確認しそのまま「紅月」を加速させる。「紅月」は上昇する。

「見せて見せる！「紅月」」

ファリナの「月島」は左腕を切断され頭部も潰されている。

「くっ！どうすれば！」

ファリナは必要に追ってくる藤堂の「螺旋」から必死に逃げていた。
「させるかあああつ！」

「螺旋」の頭部を鷲掴みにする一機の紅い機体「紅月」だ。
「超圧縮波動、行けよ！」

バン！

「紅月」の左腕から紅く眩い光が放たれる。次第に「螺旋」の頭部が膨張していく。

「何だこれ？くそつ！」

藤堂は「螺旋」の頭部を切り離し、後退する。

「渚、その兵器は？」

「説明は後だ！由井の所に合流してくれ！」

「わ、分かった」

渚の「紅月」はそのまま別の場所に飛翔する。

「はああつ」

クリスの「ファースー」はランスを向けて突進するが「斬電」の重装甲が貫けない

「隊長！」

「任せて」

クリスの「ファースー」を踏み台にして上からハンドガンを連射する。だが「斬電」の重装甲には通用しない

「どいて！亜里亜」

「えっ？」

紅い機体が左腕で「斬電」の脚部を掴む。その機体は「紅月」

「超圧縮波動、発射！」

バン！

またも紅い輝きが「紅月」の左腕から放たれた。「斬電」の脚部は破裂する様に爆発した。

「亜里亜とクリスは他の人を救出して由井の合流、いいな？」
「うん」

残る一機、トオルの乗る「バリスタ」他の機体で対抗するのは難しい、それは由井の「蒼月」も例外ではない。

バリスタはショットリニアガンを由井の「蒼月」に向けて連射、F体型に変形させ回避行動を続ける。

「俺だつてやってやるよ！」

由井は再び変形させ、ビームマシンガンを連射する

「そんな攻撃！」

「バリスタ」はビルを盾に攻撃を避ける

「くそっ！どうすりゃいいんだ？」

由井もビルなどを盾に身を潜める。

「トオル將軍一機ですが敵の増援です！」

「増援？」

「バリスタ」はフライトユニットを展開させ、上昇する。その刹那、

紅い機体は「バリスタ」の頭部を鷲掴みにする。

「弾ける！トオル！」

バン！

紅い閃光が「バリスタ」を襲う。「紅月」の新装備・超圧縮波動。

次第に「バリスタ」の頭部は破砕。「紅月」はすぐに後退。

「なんだあの装備」

トオルも距離を離して後退する。

「トオル將軍！もう防衛は不可能です！指示を」

「紅月」はすぐに由井の部隊に合流した。

「渚、その機体は？」

「「紅月」だ、このまま私達は攻める。」

戦況はすでに決している。はつきり言つてナイトメアの方が優勢だ。

「くそっ！負けたのか、僕達は」

コックピットのモニターを叩きつけ、撤退の指示をだす。

都庁は完全にナイトメアの勝利に終わった。

第九話 紅月 勝利（後書き）

機体説明

「紅月甲壱型」

超圧縮波動を搭載した紅月、頭部と右腕が排除されさらに機動性を向上させた。変形機能も一時的に廃止、戦う時は頭部を排除した為コックピットのハッチを開けたまま戦う事になる。通常の紅月にも機体は戻せる。

超圧縮波動とは名前の通り超圧縮した高エネルギーを敵の機体を送り込み、オーバーヒートさせて自爆させる。エネルギーの量を調節すれば味方に機体にエネルギーを供給させる事ができる。パイロットの配慮は考えていない為、パイロットにはかなりの負担がかかる。EZ-N「エッチ・ナイト」

亜里亜がアメリカ連邦国から持ってきた機体。見た目は由井が乗っていたガラン参式に似ているが性能や機能はまったく違う。この機体は接近戦に特化している。コックピット内が二輪車にまたがるような伏座式でパイロットは前かがみで操縦桿を握るような姿勢になる。右腕が大型クローでホバー機能搭載している。

装備 大型クロー、左腕部ハンドガン、対人型機動兵器用ナイフ「アサルト」

第十話 勝利の余韻

「ここ・・・何処だ・・・」

辺り一面が白い、ここは病室だ。あの子の事は覚えてない・・・
「起きたね？」

病室のドアから亜里亜が入って来た。

「亜里亜・・・俺・・・は？」

渚は呆然としながら亜里亜に尋ねた。亜里亜が言うには都庁を制圧した後、「紅月」から降りてすぐに気絶したと言う。

「やつぱりか・・・」

渚は俯きながら呟いた。こんなすぐに影響が来るとは思ってた。渚はベッドから降りて格納庫に向かう。

格納庫はかなり活気が漲っていた。都庁を制圧した喜びの反面、かなりの犠牲が出た。これは隠しようのない事実、それにかなり機体が破壊や破損している。ファリナの「月島」の損傷はナイトメアにとってかなりの致命傷だった。

「応千、「月島」の様子は？」

「渚出てきて大丈夫なのか？」

「そんな事より「月島」の様子は？」

「見たとおり、左腕は切断されてるし頭部は潰されている」

応千の言うとおり、「月島」はかなりのダメージを請けていた。特徴だった対機動兵器用刀「豪熱」、その刀さえも折られている。だがこの機体は「バリスタ」にも対応できる用に渚が設計した機体。七武衆の機体にも対応できるはず、今回の敗因はファリナの実作技術でもなく「月島」の機体性能が悪い訳ではない、まだファリナと「月島」の相性が悪いだけ。

（もう少し、データが必要か・・・）

渚は簡単な指示を出すと、「紅月」が収容されている格納庫に向か

った。

「ではこの紅い機体は我ら七武衆に匹敵する程の力を持っていると？」

そう尋ねるのは日本軍の副提督でありながら七武衆の一人・草壁豪くさかへいトオルたちはあの後、元本部がある富士山基地に避難していた。

「はい、現に我々の機体はその機体が触れた瞬間、爆発しました。」

トオルは豪に向かってそう述べた。豪は七武衆の隊長でもある、トオルの上司に当たる存在だ。

「確かに、データや戦闘記録を見る限り紅い機体は何か特殊な装備をしているようだ。お前達はもうよい、下がれ！」

トオル、藤堂、白河の三人は一礼し指令室を後にする。

「お前、この機体をどう見る？ 蚩」

「特殊・・・装備・・・戦って見ないと分からない・・・」

豪の隣に居た少女がそう述べた。その少女も七武衆の一人・臣獄寺しんごくじほたる蚩

「これこうじゃない！ それはこれをこうして！」

活気が漲るナイトメア、統率力があるのは渚のみ、由井にも多少はあるものの少し信頼出来ないのが本音だ。さらに多くの機体が破損している。もう一人、統率力が欲しい所。

「物資はこつちだ！」

指示を常にだす。今の渚にはかなりきつい事だ。

「トオル、いいのかよ。これじゃ草壁のおっさんの思っ壺だぜ？」

藤堂がトオルに言った。確かにトオルも今の状況は好ましくない、今にでも東京を取り返したいが機体「バリスタ」の損傷が見た目より酷く、完全に修理するのに一週間かかるとの事。

「あゝあ、私の「斬電」も足やられちゃったしな」

白河はそう呟きながら三人で格納庫に向かった。

今回の戦いの勝因はやはり「紅月」にある。超圧縮波動と言う兵器を搭載した機体、機動兵器同士なら無類の強さを誇る。だがその機体にも弱点がある。致命的な物としては右腕部、頭部を排除している事。それ故にハッチを開けたまま戦う事になる。

渚はその事については整備士の応千に聞くのが妥当だろうと思い、応千に相談した。出た結果、超圧縮波動に合わせる兵器を作る事が決まった。正式名称「紅月甲壱飛翔式」それに伴い「蒼月」も新たに「蒼月・ブラスター型」の製作も行われる事になった。

第十一話 巨壁の槍

東京の隣県のひとつ・千葉県

一週間前、ここで大量虐殺が起きた。日本軍と反乱組織の戦いと言う名目で日本軍は虐殺を行った。もちろんその中に反乱組織の人間は居たものの七割程が民間人だった。

その報せを聞いた渚は次の目標を千葉県に定めた。すでに東京湾を経由しすべての部隊も上陸、配置を終えている。後は渚の指示を待つのみ。だが未だに指示を出せないのが現状、それもすべての理由は一人の男が原因だった。

草壁豪くさかへいこう

彼は日本軍副提督でありながら七武衆の一人でその活躍は目覚しく、人望が厚い人物だ。

別名「巨壁の槍」

指揮能力も渚と同等、いやそれ以上かも知れない。それ以前に彼、専用機が強すぎる。「紅月」でギリギリ対抗できる程だ。

そして今回の戦いはどちらが先にでるか。もちろん、一気に攻め込む事が出来る。だが豪はどんな劣勢でも優勢に変える事が出来る人物。

渚は不意にパソコンから目を離れた、すると一人の少女・亜里亜を見つけた。渚は「紅月」から降り、亜里亜に近寄る。

「何してる亜里亜？」

「あつ！渚」

亜里亜も渚に気づいて、近寄る。

「昔、ここに似た所で花火やったなって」

花火・・・渚は頭をフル回転させて記憶を探った。片隅に残っていたみたいだ。微かに残るビジョン。

「そう・・・だな」

渚は小さく頷いた。

「そう言えば、いつ作戦開始するの？みんな怒ってるよ？」

「そうか・・・」

渚は拳を強く握る。そして決意する。「豪を恐れるな」。渚は自分に言い聞かせた。

「分かった。子供は早く寝ろ！」

渚は亜里亜にそう言って「紅月」に乗る、亜里亜に何か言われた気がしたが無視した。

その日は晴天に恵まれていた。時刻は十時。

「ナイトメア、総員出撃！」

渚の怒号はナイトメア全体に響いた。「おおっ！」と歓声上がる。そして同時にファリナ率いる壱番隊を中心に攻撃を開始、日本軍は応戦を開始する。

「壱番隊はそのまま前進し陸上戦艦を落とせ！」

「了解」

ファリナの「月島」は跳躍、ブリッジ部に「月下」を突き刺す。

「豪副提督、どうやら敵は三方向から進軍してる模様です」

士官の一人がそう述べると豪は腕を組む。

「30分だ。30分だけ自由にさせて置け」

豪はそれだけ告げる。士官は「はい」と頷き、再び指令室に戻る。

ナイトメアは優勢、渚にとってこの状況はとても恐ろしく見える。

まるで昔に起きた「沖縄事変」のように・・・

「沖縄事変」・・・渚がナイトメアを創設する前に起きた戦い。沖縄には最大の反抗勢力があり、最後まで抵抗を続けた所で、日本軍は難色を示していた。そこで現れたのが草壁豪だ。

彼は機転のきいた作戦を連続で行い、結果、一ヶ月続いた戦いも僅か、三日で終わったのだ。

渚は「戦況があまりにも似すぎている」と思い、零番隊を前進させ

た。

「草壁副提督、機体の整備が完了しました」

豪は頷き、パイロットスーツを着こなし、自分の機体「馬孫^{ばそん}」に搭乗する。横には黄色い機体、蚩の乗る「電光」が配置してある。

豪は「気をつけろ」と言う蚩は静かに頷いた。

「馬孫」出るぞ！」

第十二話 刹那と瞬間

渚は「馬孫」と対峙していた。機体からでも分かる威厳、そして殺気。「紅月」は左腕を前に構え、身構える。相手は副提督、操縦桿を握る手に力が入ってしまう。

「トオル達が言ってた機体ってこいつか？ 蚩」

「多分」

後方には黄色い機体「電光」が静観している。渚はそっちにも警戒して、タイミングを伺う

「行くぞ！」

先手を取ったのは以外にも豪の狩る「馬孫」槍状の武器「雷鳴」の五段突き。

一突き目

「紅月」はブラスマソードで対応する。単純な押し合いなら「紅月」は「馬孫」には勝てない渚はその事は重々承知していた。だから受け止めるのではなく軌道を逸らさせる。

二突き目

目標は「紅月」の胸部、つまりコックピット部・渚は素直に攻撃を通す筈がない。渚は「紅月」の右腕で受け止める。損傷はしたものの大事には至らなかった。

三突き目

頭部を狙ったもの、渚は雷鳴が直撃する前に敵を一蹴する。だが「紅月」の蹴りを受けた「馬孫」は微動だにしなかったが軌道は逸れた。

四突き目

横に薙ぎ払う。「紅月」は跳躍、左腕を前に突き出す。五突き目に移行される前に渚はトリガーを引いた。

刹那

紅の光が一瞬だけ豪の「馬孫」を包んだ。雷鳴を構えたまま、時間

が止まったように動かなくなる「馬孫」

「ちっ！これがトオル達が言ってた兵器か！」

豪は何回も操縦桿を動かすが反応がない、「紅月」の中に居る渚は汗を拭った。

「これでしばらくは動けない」

「紅月甲壱飛翔式」は「馬孫」を見下すように上昇、そのまま「電光」に襲いかかる。

「フアリナ隊長、敵の陣形が崩れて来ています」

「よし、このまま攻め込む、零番隊、四番隊は我が隊に続け！」

流れ込む黒い「セルク」そのなかに紅い機体と蒼い機体も入っている。

戦況は着々とナイトメアが進軍していった。

迂闊だった。

黄色い機体、「電光」は一見、武装をしてない様に見える。だがそれが最大の罠だった。

「指が伸びる？」

「電光」の指部が伸びるのだ。鞭の様にしなり、距離に関係なく伸びる。

渚は甘く見すぎていた。見た目は「紅月」と同じ位細いバンツ！

両腕を鞭の様に操る「電光」、渚は近づけずにいた

「つままない」

操縦桿を巧みに扱う蚩、「電光」に死角はない。「紅月」は森林を盾に隠れる。

「丸見え」

「電光」はバツサバツサと鞭を振るい、木々をなぎ倒す。だがそこそが渚の狙い

「今だ！恋那！」

渚が叫ぶ。その刹那、朱色の機体が「電光」の左腕を切り捨てる。

「バリス」朱色の機体の名前だ。

「大丈夫ですか？兄さん」

両腕で紅い刀身のサーベルを構える「バリス」その中から声が聞こえた。

「ああ、助かったよ恋那」

形勢逆転、かと思った瞬間。衝撃が「紅月」を襲った。

握り拳の「馬孫」

左腕、頭部がない「馬孫」

「こいつ、自分で衝撃を機体に当てた？」

「まだだ！まだ終わらん！」

再び加速する「馬孫」、「紅月」が体勢を立て直す前に更なる追撃として頭部を地面に叩きつける。

「兄さん！」

「バリス」は「紅月」に接近しようとするが目の前には「電光」が立ちはだかる。

「貴方の相手は私」

「くっ！」

渚はコックピット内で流血した頭を抑え、トリガーを引く
ドオン！

紅の業火、超圧縮波動を遠距離用に改造した・超圧縮波動砲。「紅月甲壱飛翔式」の最大の改造点だ。

だが決して無駄ではなかった「馬孫」の両足を消滅させたのだ。

「豪、ここは撤退。私達の負け」

指の鞭が五本から三本に減っている「電光」が豪の乗る「馬孫」に告げる。

「仕方ないか・・・司令部、聞こえるか？」

「はいっ、副提督」

「全軍に撤退命令をだせ！」

「はっ！」

士官が敬礼すると豪は脱出シートを使い、姿を消す。それと同時に

「電光」も姿を消した。

「兄さん、大丈夫ですか？」

恋那の声、だんだん薄れていく。渚の意識はそのまま途絶えた。

第十二話 刹那と瞬間（後書き）

機体説明

BA-SN「馬孫」

全長 4、69 m

日本軍副提督、七武衆の一人である草壁豪の専用機
耐久性は高く、馬力や加速力は紅月を遥かに超える

装備 対人型機動兵器用槍「雷鳴」

DN-KU「電光」

全長 4、2 m

七武衆の一人、臣獄寺蛭専用機。機動性が極限まで高められ、武器も指部だけに絞られている。武器は十本の指を鞭の様に使う
装備 指部型鞭「ワイヤーウィップ」

第十三話 三県 同時 進行

千葉県を開放して一週間。ナイトメアは勢いに乗り北上に向けて進軍した。反乱組織が惜しみない協力で進軍もスムーズに進んだ。

「零番隊は秋田県周辺を、壱番隊は岩手県周辺を」

そのため渚は前線に赴くことなく指揮だけに集中する事が出来た。渚達・本陣は宮崎で陣を敷いていた。

「貳番隊は山形県に進軍、超圧縮波動砲の使用を許可する！」
『了解！』

陸上戦艦「無頼」のブリッジ部のモニターに各県の戦況が映し出されている。そこに居るのは応千と恋那を含めた数十人

「零番隊は二手に別れて進軍、壱番隊は転進」

渚は常に絶え間なく指示を出す。これだけ部隊を展開させてる訳だ、死傷者だつて出るわけだから本陣も忙しい

「山形県に医療班の一部を向かわせろ！増援？とりあえず陣形は崩すな！」

渚はこめかみに手を当てる。

「渚、「カウラ」が一隻出せるぞ！」

応千の叫び声、渚は「セルク改の部隊を向かわせろ！」と指示を出す。渚は恋那を呼び止める。

「恋那、今から特務隊は零番隊の後方支援に向かつてくれ！」

「はい、兄さん」

渚は苦笑した。

「兄さんて呼ばなくていいんだぞ？普通に渚で」
だが恋那は首を横に振る

「偽りの記憶でも一時期は私達は兄妹だったんです。呼ばせてください。兄さんって」

恋那は笑みを浮かべる。渚は苦笑し指揮に没頭した。

「二番機と三番機は私と共に切り込みに出る、他の機体は後方から援護、いいな？」

「了解」

刀型の武器を持つ三機の機体。中央にはファリナの乗る月島日本軍所属のセルクは次々と斬り倒す。三機の連携は完璧と言ってもいいだろう。

「クリスは私と、他の三人はポイントBに移動。他の機体は後方支援、現段階はこれ以上に命令が出てないわ！」

「了解」

零番隊・ナイトメア総帥、渚の直下部隊。ナイトメアの中でも壱番隊と並ぶ最強部隊の一つで同じく連携も完璧、問題はない

由井率いる式番隊は圧倒だった。ファリナや亜里亜みたいな連携ではなく力で強引に押す戦法を取っている。やはりナイトメアの切り札・超圧縮波動砲が戦況をひっくり返したのだろう。

現に式番隊と山形県そとの反乱組織を含めて300弱で日本軍は900、戦力差は三倍だったが今では降伏や敵前逃亡する者が現れる始末だ。
「こちら式番隊、敵本部の降伏確認、新たな指示を仰ぐ」

「応千、「無頼」を一隻だけ山形県に向かわせてくれ、救援物資を積ませてな」

「じゃあ山形県は・・・」

「ああ、終わったみたいだ。後は民間人を助けるだけだ。」

応千は頷き整備班に指示を出し、本陣から一隻だけ「無頼」が離れていく

渚は艦橋に座る。ちょうど恋那がモニターの一角に移って居た。

「特務隊、発進します」

「亜里亜を頼むぞ」

恋那は「はい」とモニター越しでそつと微笑むと通信を切り、出撃

して行つた。

「こちら壱番隊、本部の降伏を確認」

壱番隊、ファリナの部隊からの通信

（思ったより早かったな）

ファリナは月島の中で安堵の息を漏らした。幸い戦闘不能に追い込まれた機体はあったものの死亡者が出なかったそれだけでも功績だ。

零番隊が居る秋田県も勝敗が決しようとしていた。それに特務隊が向かっているのだ、勝利は目前。渚は「無頼」を手配し秋田県へと向かわした。

時刻は午後六時

三県同時進行は無事成功を収め、渚は「無頼」の一部屋を利用し作戦プランを確認、そのまま眠りについた。

第十三話 三県 同時 進行（後書き）

機体説明

「紅月甲壱飛翔式」

パイロットの負担を考慮し、新たな頭部と右腕さらに後部に大型ブースターを装備する事でより超圧縮波動の使用回数が増えた。

「蒼月・ブラスター型」

遠距離型超圧縮・超圧縮波動砲を装備した機体で、「紅月」と違い回数制限がある。

第十四話 終わり までの道

残るは青森県と北海道。渚は一年前と同様なミスを犯さない為、各部隊の隊長を集め会議を繰り返し綿密な作戦計画を立案していた。まずは青森県に在住している軍をいかに迅速かつ被害を最小限に抑えられるか。

「やはり、俺が出るか・・・」

専用室として与えられた「無頼」艦内に一人、呟いた。渚には被害を最小限に抑える自信があつたが自分の実力を過信するのは一番よくないのは一年前の戦いで分かっている。

翌日、渚は部隊の再編成を行つた。理由は団員が増えた事だ。先日
の三県同時進軍作戦をきっかけに反乱組織はナイトメアに吸収され、
団員が2000人弱なのに対して倍の4000人に増えたのだ。渚
にとってはとても都合がよかった。軍事面の総責任者をフリナに
任せ、整備全般は応千と役職が増え、亡命していたミリアが帰つて
来た事により医療班も復活した。

渚は青森県に在住している軍を倒す為、「無頼」8隻を進軍させた。

「壱番隊、貳番隊を中心に進軍を開始！参番隊と四番隊は後方から
支援、零番隊に特務隊は私の指示を待てっ！」

「無頼」のモニターには無数の機体反応が示されている。友軍は青、
敵軍は赤。次々に赤の反応は消えていく。「無頼」艦内での確な指
示を下す渚、いざとなつたら自分も出撃できるように紅月も準備さ
せている。

「貳番隊いや由井、超圧縮波動砲の使用を許可するが？」

渚はあえて疑問系で訪ねた。別に使用しなくても勝てるからだ。

『悪いが使わないで、無駄にデータ取られても面倒だろ？』

やはり渚の予測した答えが返ってきた。渚は「よし」と言つて通信

を切る。

「ファングか、親衛隊機だが所詮は！」

ザンツ！

ファリナは機体との相性がよくなり既に自分の手足となりつつあった。そして親衛隊の機体を切り刻む。

「壹番隊はこのまま進軍する！遅れるなよ！」

ファリナの駆る月島は次々に敵機を撃破、兵の士気をあげていく

「参番隊各機！弾幕を張れ！」

ロフティの怒号が響き渡る参番隊、この部隊も着々と功績を挙げていく。遠距離型のミサイルは尽く参番隊の弾幕の雨の中散っていく。

・

「さて、そろそろ終わらせるか」

渚は欠伸を噛み殺しながら呟いた。戦況はこちらに有利、勝敗は決していた。

「零番隊は壹番隊、貳番隊の増援に、特務隊は参番隊と四番隊の援護」

別に出撃させる必要は無かったが迅速に終わらせる為、部隊を投入したまで。

結果、30分後にこの戦いは終結した。

「青森、陥落しました！」

その知らせが北海道基地・本部に響く。ちょうどそこには七武衆の面々が揃っていた。無論、提督もその場に居る。

「ほお、これは面白い」と呟く提督、七武衆の面々は緊張に包まれていた。提督は指令室の中央に立ち堂々と声を発した。

「七武衆及び日本軍兵士に告げる！我々はこの場で敵を薙ぎ払い！ナイトメアを壊滅させ、愚かな反逆者を捕らえ、処刑するのだ！」

「うおおっ！」

歓声が挙がる。これにより日本軍兵士の士気も上がった。そして席に座る。

「見せてみる、我が息子よ。貴様の手にした力をな」
そして提督の笑い声が響いた。

第十五話 あと わずか

十月、空が夕闇に染まりつつある時刻。

「無頼」ブリッジに隊長格を集めた。最後の作戦会議。いろんな不安要素も計算に入れ勝利率を割り出した。

50、9%

これが数字で表した結果・・・

低いと見方をする者もいれば高いと言う者もいる。だが渚はこの勝利率を40%下げる最大の不安要素があつた訳で渚は言わずに自分の中に閉じ込めた。悪戯に兵の士気を下げるのも良くない

「炎龍」

それが渚にとって最大の不安要素だった。

翌日

渚は亜里亜に言われた通りに「無頼」のデッキに向かった。

「ごめんね、忙しい時に呼び出して」

「構わないよ、別に。今はみんなに最後って言うのは変かも知れないけど休んでおけって言っておいたから」

「そう・・・」

「で、何か用？」

「うん・・・、明日が最後の戦いだよね？」

「さあ、どうかな。確実に終わって保障はないし、それに昨日の会議で出た勝率も見ただろ？だから分からない」

そう最大の不安要素があるのだから・・・

「渚自信は勝てると思う?」

「勝てる自信ある? って聞かれた無いって答えるしかないよ。俺だつて人間、死ぬのは怖いしそれ以前に人が大勢死ぬのは嫌い……だからこの道を選んだ。それは亜里亜も分かっているだろう?」

すべての始まり……三年前の虐殺

「うん……」

「もし、戦いたく無かつたら言ってもいいぞ? 本来ならお前はパイロットじゃないから」

「さすが言わないよそれだけは……私だつて人を殺してるんだから」

渚は苦笑した。まさか亜里亜が人を殺したなんて言うとは思わなかったから

「そうか、亜里亜は戦いが終わったらどうする?」

「それは私達が勝った事を前提で聞いているの?」

「そう考えて貰っていいよ」

「その事で約束して欲しい事があるの」

「約束?」

「うん……この戦いが終わったら一緒に暮らして!」

亜里亜の言葉の最後方は語気が強まっていた。それほど本気なのだろう。渚は笑みを浮かべ「いいよ」と答えた。そして亜里亜は走り去って行く。渚はそれを見送りながら「ごめん」と内心で謝罪した。

その機体は白く神々しい姿をした人型機動兵器、名は「バリスタ」

と言う。その前に呆然と立っているのは三年前まで渚の親友でもあった少年・夜見トオル

「トオル君、ちょっといいかしら?」

不意に女性の声がした。その女性はトオルの専属オペレーターで今はトオルの方が階級は上だが今でも階級に關係ない態度で接してい

る。

「バリスタの新兵器・剛圧砲が完成したわ」

「そうですか、間に合ってよかったです。」

「これである真紅の機体に対抗できるかもね」

「だといいですね」とトオルは笑みを浮かべ答えた。それから色々なマニュアルを渡され、トオルはしばらくそれに没頭する。

（渚、君には悪いけど死んでもらうよ。）

トオルは心の中で呟いた。

「どうしたんだ？こんな時間に」

自室で休んでいた渚の所に半ば強引に由井が入ってきた。

「いや最後の晚餐でもしようぜ」

「晚餐で・・・まあいいか」

ため息を吐きながら渚は由井に座るよう促した。

「俺達、酒は飲めないからコーヒー持ってきた・・・ってなんだその以外って感じの顔は？」

「そのままの意味。普通お前なら酒でも持ってきてそうだからな」

「馬鹿にするな！」とハリセンが飛んできたが難なく避ける。

「お前の行動パターンは予測済み、それに一年前にもこんな事があった気がする」

「まあ、とりあえず乾杯と言うことで」

二人でコップを合わせる。本来ならワインなんだろうが中身はコーヒー

「で、本当の目的は？どうせ本当に晚餐しに来た訳じゃないだろ？」

「まあな、言っておきたい事があってな」

「なんだ？」

「死ぬなつて事」

「なんかそれ言われたの二回目だったかな・・・そんな死にそうに見えるか」

由井は無言で頷く、渚は一気にコーヒーを飲み干す。

「その事に関しては重々承知してるよ」

「あと途中に指揮を放棄するのも・・・」

「それも重々承知」

その後、二人は談笑しながら昔の事を思いでしていた。

「あの時、渚は転んだぐらいで泣いてたよな」

「それを言うならお前だつて浅い川で溺れてたじゃないか」

「こんな他愛のない会話も何時までも続くと思つていた三年前・・・」

「さあて、明日早いんだろ？ここらで上がらせてもらうぜ」

「ああ、明日な」

「絶対・・・勝つてやろうぜ！」

「ああ」

そのまま夜は明けていく。全ての終わりを告げる為に、そして人々の想いを告げる為に・・・

第十六話 無情の閃光

「ナイトメア！全機出撃！」

時刻は早朝六時、ナイトメアの団員から歓声上がる

「由井！道を切り開くのはお前だ！」

『よっしゃー！任せな！』

一直線に紅の業火、津軽海峡の艦隊を全滅させ、次々にナイトメアの人型機動兵器部隊が上陸を開始する。

「応千、地上部隊の指揮を頼むぞ」

『お前は死ぬなよ、それにあれは一回しか使えないからな』

「重々承知」

『分かっているならいいけど、それより亜里亜ちゃんと恋那ちゃんを死なせるなよ！』

「保証、しかねるな」

『そろそろ「カウラ」が予定位置に到着する、死ぬなよ』

「了解って言うのも変かな？じゃあな」

『じゃあなじやない、またな』

「ああ」

渚は通信を切り、操縦桿を握り直す。

「零番隊及び特務隊に告ぐ、フロートユニットはかなりエネルギーを消費する。時間に留意せよ！」

「了解」

渚は軽く笑むと「カウラ」のハッチが開く。渚は操縦桿を握り、「紅月甲壱飛翔式」を加速させる。

「零番隊、特務隊出動。全員、死ぬなよ！」

「提督、敵反抗勢力が上陸を開始しました。」

指令室に居る人間は皆、動揺し慌てている。その中、一人の人間だ

けは微動だにしなかった。

「落ち着け！これでは敵の思う壺だぞ！迎撃はマニュアルどおりに、敵の数は少ない！こちらの方が分があるのだ！七武衆はただちに出現、**「炎龍」**の準備はどうなっている？」

士官は一礼して、書類を読み上げた。

「すでに準備は整っているのですが……。不祥事が起こり、三十分程お時間を頂きたいのですが……」

「構わん！なんとしても敵部隊を潰すのだ。」

「はっ！」と士官は一礼、席に着く。

「あんな奴に私が敗れる訳にいかん」
提督は呟く

洞爺湖付近。

壱番隊はが先頭になり、渚の「**紅月甲壱飛翔式**」は丁度そこに降下した。

「フアリナ、状況は？」

「優勢だ、だが七武衆が出たら戦況は……」

「言っな。七武衆は全部やる。」

「機体性能に頼るのは良くないと思うが……」

「無論、俺一人じゃない。由井が居る。」

フアリナはそこで黙る。渚を信頼しての事か……

「30分後に本部が特定できるはずだ。零番隊は宗谷岬、特務隊は襟裳岬に向かわせた。壱番隊は我々の中核だ。全滅するなよ！」

「了解している。」

「トオル君、**「バリスタ改**」の調子は？」

「システムオールグリーン、行けます！」

日高山脈の一角、カタパルトが延びている。そこには白い人型機動兵器

「剛圧砲の使用に限りがあります。それと……」

「それと？」

「七武衆の指揮権が君に移りました。」

「僕に？」

「そうよ。」

「分かりました。では行つて来ます。」

トオルの操縦桿を握る手に力が籠る。

「バリスタ改、夜見トオル・・・行きます。」

「バリスタ改、発進！」

蒼い翼を纏った白い騎士「バリスタ改」

「ついに出てきたか・・・」

七機の編隊。間違いない、七武衆

「由井、聞こえるか？」

『ああ、出てきたか？』

「フォーメーション、全部覚えたか？」

「ああ」

渚は操縦桿を強く握り直す

「フォーメーション、F32」

紅と蒼の戦士、二機が七機の中に突っ込む

「あれが指揮官・・・各機、散開。白河は無意味に撃つなよ！」

「ええ」と不満の声が上がったがトオルは無視、サーベルを引き抜き、紅い機体に向かって行く

「渚、今さら許しは乞わないよ」

『敵は思った通りに散開したな』

「ワイドレンジに切り替え・・・」

『した。撃てばいいんだな』

「ああ」

蒼い機体から放たれる紅の業火、瞬く間にトオルの乗るバリスタ改

以外を飲み込んだ。

「あの光、紅い機体だけじゃなかったのか!？」

「トオルウウウツ!」

紅月はバリスタ改に左腕の大型クローを向ける。だがトオルも一筋縄ではいかない。バリスタ改はサーベルを引き抜き紅月の大型クローを受け止める。

「炎龍はどうか？」

士官にそう尋ねる提督。士官はそのまま提督を促す。

「これより「炎龍」は敵、テロリスト共を殲滅する!」

提督がそう宣言すると日高山脈が割れた。

「参番隊、状況報告!」

ファリナの声が響く、状況は変わらない。だが死傷者が増えていく一方

その瞬間

大地が激しく揺れた。いや揺らされたのだ。

そしてファリナ達の目の前には・・・

「巨大空中戦艦!？」

そして無情にも空中戦艦から閃光が幾度となく、ファリナ達の上から降り注いだ。

第十七話 旧友 との 共闘

あれから何時間経った？

そんなに経ってないはずだ・・・

だけどこれはなんだ？なんなんだ、これ。こんなの・・・こんなの・

・

「虐殺じゃねーかあっ！」

辺り一面は焼け野原、敵も味方も見境なしに殺して。

「くそおおおっ！」

思いっきりモニター画面を叩いた。

「応千、聞こえるか？」

「部隊の殆どは壊滅、死傷者の数は不明。」

「由井・・・蒼月？」

「健在だ」

「ありがとう」

渚はそれだけ言って通信を切る。モニターには唯一の味方、蒼月の

機影

「渚・・・」

「言っな。仇を取るぞ」

「弔い合戦か？まだ死んだとは・・・」

「この際だ、死んだ事にしよう。その方が殺気が出てくる。」

「ま、お前が言うんだ、言うとおりにしてやるよ」

「じゃあ、行くぞ」

目の前に立ちはだかる巨大な人型機動兵器「炎龍」。50mは超えているだろう。その「炎龍」が全てを壊した・・・

容赦はしない。

「フォーメーションE32」

「了解」

蒼月は変形、紅月は突撃、炎龍は弾幕を張る。激しい弾幕の中、二

機の機体が舞う。

「そんなミサイル！」

蒼月はビームマシンガンを連射、紅月はその後ろから左腕の大型クローを突き出す。

「食らえ！」

紅の業火、道が開く。紅月は開いた道突撃していく。

『おい！作戦が違うぞ』

「うるさい！」

そのまま直進する紅い機体。そしてその前に立ちはだかる白い機体。

「トオル、どけ！今はお前に構ってる暇は無い！」

だがバリスタ改は動かない。

「何とか言えよ！俺は・・・俺は・・・」

『渚』

トオルからの通信、渚はじつと聞く

『今の君一人には提督は撃てない』

「何！」

『一人・・・ではね』

「えっ？」

『ここは一時休戦だ。由井も居るんだろう？ここは三人で協力しよう』

渚は笑みを浮かべて、頷いた。

「分かった。作戦は考えてある、由井、トオル行くぞ！」

『了解！』

紅、蒼、白の機体が大空で、炎龍めがけて飛び立つ。激しい弾幕も簡単にすり抜けて。

「だめ、エツチナイトの通信機能が壊れてる。恋那ちゃんの方は？」

「こつちもだめ。このままじゃ・・・」

二人は空を見上げた。空では地上と違い戦闘つえが続いている。

「今だに三機が戦闘を続いています。いかがなさいますか？」

一人の士官が提督に指示を求めた。

「大型剛圧砲の使用を許可する。」

「ですが、それを使ったら地上に居る部隊が……」

その意義を申し出た士官。提督は銃を向け、引き金を引く

「もう後戻りは出来んのだ！このまま世界を我が手中に収めるのだ！もうためらいはない！撃つのだ」

士官達は元の場所に帰り、器用にパネルを動かす。

「剛圧砲、敵射程内です！」

炎龍は巨大な砲身を構える。

『渚、早くしないと取り返しのない事に……』

急に慌てだしたトオル。それを察した渚は訊ねた。

「どう言う意味だ？」

『あの巨大な砲身は日本軍が開発した新兵器……剛圧砲だ！』

「剛圧砲？なんだそれは？」

『簡単言えば君の機体に搭載されているあの紅い光だよっ！』

「超圧縮波動の事か？」

『多分、それだ』

「分かった」

渚はトオルとの通信をきり、由井とに通信に変える。

「由井、超圧縮波動砲は使えるな？」

『何とか』

「俺が合図したら撃て！」

『分かった』

通信を切り、渚の紅月は左腕の大型クローを前に突き出す。それにあわせ蒼月も砲身を向ける。

「たのむ、当たってくれ……撃て！」

刹那

紅い光と蒼い光

その二つが押し合い、そして・・・消えた。

「つう」

渚は頭を抑えながら紅月を再起動させる。

「炎龍は？」

渚は紅月を上昇させる。炎龍もそれなりのダメージを受けていたらしくあちこちに破損が見られる。紅月は頭部と左腕が破損、そのためハッチを開きながら上昇させる。

「あそこだ！」

紅月はそのまま炎龍艦内に潜入した。

第十七話 旧友 との 共闘（後書き）

機体説明

「炎龍」

全長 52 m

日本軍が密かに開発した大型空中戦艦

巡航モードと人型モードがあり、従来の戦艦には無いシステムが搭載されている。新装備の剛圧砲は富士山を消滅させる程の威力を持つ。剛圧砲はトオルのバリスタ改にも装備されているが威力は炎龍が上

最終話 いつもの 日常

紅月は艦内に潜入、多少の迎撃はあったものの両脚部を失う程度で済み、渚はそのまま紅月を乗り捨て、炎龍のブリッジへと駆け抜けた。

「由井、大丈夫かい？」

「ああ、なんとか。それより俺の機体は？」

トオルは指差し、首を横に振る。そこには朽ち果てたバリスタ改と蒼月が存在した。そして炎龍は健在

「俺達の負け・・・か」

由井とトオルはうなだれた

「お久しぶりです、父上」

渚は一礼する。

「久しぶりだな、我が息子よ」

提督も態度を変えずに言う

「あなたにお聞きしたい事があります」

カチャッ！

お互いにゆっくり銃口を向ける。

「よかるう」

「なぜ三年前・・・東京を壊滅させたのですか？」

「くだらない事を」

「くだらない？そうですね、貴方にとって東京が邪魔だったいや母さんが邪魔だった。たったそれだけの理由でどれだけの人が死んだと思ってるんですか！」

怒りのあまり引き金を引きそうなる渚。それにたいして態度を変えない

「貴方は罪を償うべきだ！」

「私が罪だと？それは弱い者の言い訳だっ！」

「弱い者？言い訳？あなたって人は・・・でも全て忘れさせます。」
「何？」

渚は応千に渡された物を取り出す。

「貴様っ！なぜそれを！」

「僕はあたなの息子です。だから昔これの設計図を暗記したんです、でも記憶が曖昧で未完成ですが一回だけなら使えます」

応千から渡された物・・・それは一年前に提督がトオルに使わせた記憶抹消機

「罪を償うなら死んだ方がましだ！」

提督は自分の頭に銃口を向ける。

「貴方って人はっ！」

渚はそのまま駆け寄る

バアッン！

炎龍の艦内に銃声が鳴り響いた。

・
・
・

あれから一年

トオルは七武衆からの強い推薦により無事に日本軍を提督に就任。

名前も元の自衛隊に戻し日本の復興に力を尽くしていた。

由井と恋那は恋那の両親を探す為、世界各国を旅している。

ロフティとサリーナはファリナの三人はトオルからの強い願望で世界の紛争鎮圧に勤めていた。

渚と亜里亜は・・・

「今日は学校じゃないのか？亜里亜」

渚は欠伸を噛み殺しながら制服姿の亜里亜に言う。

「いいじゃん、別に」

「よくない、トオルのおかげで学校行けてるんだからな」

「学校か・・・渚と一緒にきたかったなあ」

「我がまま言うな、俺は今日も父う・・・じゃなかった親父の居る病院に行くから遅くなるぞ」

渚は馴れないスーツを着て、トーストをかじる。それを眺める亜里亜

「ん？なんか付いてるか？」

「ううん・・・平和になったんだなって」

「熱でもあるんじゃないか」

「もう、なんでもない。行って来ます」

亜里亜は少し怒ったふうに外へ出る。渚はただそれを見送る。

「平和になった・・・か」

何処までも広がる大空を渚は見つめた。

「父さん、貴方がやった事は許せないけど・・・平和になれた事は感謝しています」

最終話 いつも 日常（後書き）

曖昧な終わり方になってしまいました・・・
ここまで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2282e/>

元の日本へ・・・2nd

2010年11月16日09時57分発行